

# 『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』のパリ草稿 —所有者をめぐる調査—

土橋友梨子

## はじめに

これまで、ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712–1778) の『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』 (*Rousseau juge de Jean-Jacques*, 1780年、1782年出版。以下、『対話』と略記) の清書原稿は4冊存在すると考えられてきた。それらは BnF 草稿、ロンドン草稿、パリ草稿、ジュネーヴ草稿と呼ばれている。

ルソーは生前、これら四草稿それぞれを知人や友人に託した。本稿で扱うパリ草稿を除いた3つの草稿に関しては、委託された人物たちが自分自身でルソーから『対話』を託されたことを証言している。まず、BnF 草稿を託されたのはエティエンヌ・ボノ・ド・コンディヤック (Etienne Bonnot de Condillac, 1714–1780) である。彼はルソーの願いに忠実にしたがって、「[...] (草稿を) 私に託してきた人は、この小包が今世紀が終わるまで開封されないことを求めている [...] フリュウ城にて、1776年6月1日、コンディヤック」という覚書を付けた封筒に『対話』の草稿を入れ、安全な場所で保管した<sup>1)</sup>。BnF 草稿は紆余曲折を経て、1996年からフランス国立図書館 (La Bibliothèque de la France) に所蔵されている。

ロンドン草稿を託されたのはブルック・ブースビー (Broock Boothby,

『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』のバリ草稿（土橋）

1744-1824) というイギリス人青年であった。ロンドン草稿は「第三対話」までであるうちの「第一対話」しか含んでおらず、ルソーはブースビーに続きを渡すことはなかった。ブースビーは託された草稿の1ページ目に自分自身で、「この草稿は1776年4月6日にジャン＝ジャック・ルソーから委託された」と書き込んでいる。この草稿はブースビーによって「出版者の序文」が付けられ、1780年にイギリスのリッチフィールドで出版された。その後、ロンドン草稿はブースビーによって大英博物館に寄贈された<sup>2)</sup>。

ジュネーヴ草稿は、1778年5月12日に友人ポール＝クロード・ムルトゥー (Paul-Claude Moutou, 1731-1797) に託された。ムルトゥーへの委託の場面は、彼の孫によって詳細に語られている<sup>3)</sup>。ルソーの死後、ムルトゥーはピエール＝アレクサンドル・デュペール (Pierre-Alexandre DuPeyrou, 1729-1794) とルネ＝ルイ・ド・ジラルダン侯爵 (René-Louis de Girardin, 1735-1808) とともに、『ジャン＝ジャック・ルソー全集』 (*Collection complète des Œuvres de J. J. Rousseau, 1782-1789*) を出版した。『対話』は「回想録の第二部」として、全集の第11巻に収められている<sup>4)</sup>。ジュネーヴ草稿は、ムルトゥーのひ孫であるアメリー＝ストレッカイゼン＝ムルトゥー (Amélie Strekeisen-Moutou) によって、1835年にジュネーヴ図書館に寄贈された。

ところがバリ草稿の持ち主であった人物は、草稿の所有について自らは公にしていない。この草稿は1819年に800フランで獲得され、国民議会図書室 (La Bibliothèque de l'Assemblée nationale) で所蔵されている<sup>5)</sup>。持ち主に関して私たちに残されているのは、バリ草稿の裏表紙に添付されている、四人の人物の名前が列挙されているメモ書きのみである。そのうえ、このメモはいつ、誰によって書かれたのかまったく不明なのだ。

ルソー、ジャン＝ジャックを裁くというタイトルのルソーの草稿は、作家自身によってクラマイエル家の一人の夫人に託された。彼女はそれを王領管理官クレリー氏に託した。彼はそれをド・

ラ・シャペル氏に託した。それあと、その草稿はフロベール氏に渡された<sup>6)</sup>。

だが、四人の人物の名が列挙されたメモ書きが残されているにも関わらず、ルソーの死後にパリ草稿を持っていたのは、これまで王家建造物監督官ダンジヴィレ伯爵（Charles Claude Flahaut de La Billarderie, comte d'Angiviller, 1730-1809）であると考えられてきた。なぜなら、『ジャン=ジャック・ルソー全集』の編者の一人であったジラルダン侯爵が、『対話』の草稿のその他の一部はダンジヴィレ伯爵が持っており、彼はこの作品が印刷されるべき類のものではないと考えているので、私の要求に対して、草稿はテレーズに返すのがよいと言っています」とデュペールーに書き綴っているからだ<sup>7)</sup>。保有者本人の証言の不在や謎めいたメモ書きからもわかるように、現存する4つの草稿のなかでもっとも謎の多い草稿はパリ草稿といってよい。この草稿を所蔵していたフランス下院図書室（現国民議会図書室）でさえ、かつてはパリ草稿とジュネーヴ草稿を同一視し、『対話』には3つの草稿しかないと報告していたのだった<sup>8)</sup>。

しかし、2016年秋にクラシック・ガルニエから出版された最新の校訂版が、パリ草稿を取り巻く謎に対して斬新な説を唱えた。校訂者であるジャン=フランソワ・ペラン（Jean-François Perrin）が別の一冊の存在の可能性を示唆しているのだ<sup>9)</sup>。彼によると、国民議会図書室に所蔵されている草稿と、ダンジヴィレ伯爵が保有していた草稿は別の草稿であるという。すなわち、彼は未だ発見されていない別の草稿の存在をほのめかしているのである。だが、本当にそのような草稿が存在するのだろうか。

本稿では、パリ草稿の受託者および保有者をめぐるこれまでの研究をまとめたあと、なぜジャン=フランソワ・ペランがこのような説を唱えるに至ったのかその経緯と理由を示す。そして、草稿を委託され、所有していた人物本人の証言を発見するまでには至らなかったが、これまで未発見・未調査だった資料を提示しながらペランの説の誤りを提示することを目的

『ルソー、ジャン＝ジャックを裁く』のバリ草稿（土橋）

とする。

## 1. バリ草稿は誰に託されたのか

バリ草稿に関して、なぜこれほどまでに情報が錯綜しているのか。それは、他の三草稿と違い、バリ草稿をめぐるのは、ルソーの証言も受託者たちの証言も見当たらないからである。そもそも、『対話』自体なぞの多い作品である。1772年から1776年に執筆されたというこの作品は、人知れず書かれたといっても過言ではない。まず、『対話』の執筆時期と重なる1770年代のルソーの暮らしぶりについて触れておきたい。

『エミール』(*Emile ou de l'éducation*, 1762) と『社会契約論』(*Du contrat social*, 1762) の断罪後に始まるおよそ8年にもわたる辛い逃亡生活を終え、ルソーは1770年に再びフランスの地に戻ってくる。1770年6月、ルソーはパリのプラトリエール通りにある自宅からサン＝ジェルマン (Claude Aglancier de Saint-Germain, 1718-1788) に近況を書き綴っている。「私は3週間前からパリにいます。昔の住まいに戻り、知人たちと再会し、以前と変わらぬ生活を取り戻しました。つまり、かつての職である写譜をしています」と<sup>10)</sup>。ルソーは、フランスでは表立った活動をしないということを経験したため、再び本を書いて発表することは控えなければならなかった。作家として書くことをやめたルソーはチェスをしにカフェ・ド・ラ・レジャンスに行ったり、パレ＝ロワイヤルへ通った。また、写譜だけでなくオペラを作曲したり、植物採集をしに散歩がてら植物園や公園に通っていた<sup>11)</sup>。その一方で、彼は自身の潔白を公衆に知らしめることを諦めておらず、『告白』(*Les Confessions*, 1782-1789 出版) の朗読会を敢行するのだが、二度目の朗読会のあと、デピネ夫人の要請で警察が介入し、それ以降の朗読会は禁じられる。こうして、ルソーは目立った動きをすることができなくなったのである。

とはいえ、ルソーを訪ねる人はあとを絶たなかったようだ。だが、不思議

議なことに、ルソーの晩年の暮らしぶりを知る人々は、口々に写譜の仕事に言及するにも関わらず、『対話』の執筆どころか、その存在について誰も話していない。例えば、しばしば彼の家を訪れ、多くの時間を共に過ごしていたベルナルダン・ド・サン=ピエール（Bernardin de Saint-Pierre, 1737-1814）は『ジャン=ジャック・ルソーの生涯と作品』（*La vie et les ouvrages de Jean-Jacques Rousseau*, 1907）を記しているが、親しく過ごしていても『対話』の存在を知らなかったのであろうか。彼はこの作品について一言も言及していない<sup>12)</sup>。また、教育論『エミール』の熱心な読者で、写譜の依頼を口実に、1774年にルソーに会いにきたマルセイユ出身のクロード・エイマール（Claude Eymar, 1748-1822）も、著書のなかでルソーとの交流を詳細に描いているにも関わらず、『対話』には触れていない<sup>13)</sup>。ほかに、ジャンリス夫人は一時期頻繁にルソーと行き来しており、食事をともにしたり、劇場へと足を運んでいたようであるが、それでもやはり、ルソーが新たな著作の執筆に取り掛かっていることには何一つ触れていない<sup>14)</sup>。

同時代人たちの証言が存在しないだけではない。この時期のルソーの書簡はほとんど残されていない<sup>15)</sup>、『対話』の執筆や委託をめぐるのは、ルソー自身もこの作品のあとがきである「さきの著作のてんまつ」（« l'Histoire du précédent écrit »）にしか証言を残していないのだ。このあとがきのなかで、ルソーは三つの清書原稿、すなわち「ノートルダム寺院への委託しに失敗し、アカデミシアンに託した草稿」（BnF 草稿）と「イギリス人青年に託した第一対話のみの草稿」（ロンドン草稿）、そして「今まさに手元にある草稿」（ジュネーヴ草稿）については言及しているのだが、もう一つの清書原稿であるパリ草稿については一言も触れていない<sup>16)</sup>。そのため、清書原稿は4冊あるにもかかわらず、一見すると、3冊だけしか存在しないかのように読めるのである。

こうした証言の少なさにもかかわらず、『対話』の草稿の持ち主がダンジヴィレ伯爵であると推測できるのは、ジラルダン侯爵が自宅に保管し続

けた、『ルソー全集』出版交渉のための膨大な数の手紙のおかげである。1778年7月2日、ルソーはジラルダン侯爵から提供されたエルムノンヴィルの屋敷にて、妻であるテレーズのそばで波乱に満ちた人生を終えた。彼の死後、ジラルダン侯爵、ムルトゥー、デュペールーの三人は『ルソー全集』出版のために、まず、侯爵を中心として、各所に点在していたルソーの草稿を収集し始めた。草稿の所有者との交渉の様子は、ジラルダンが残していた書簡から窺い知れる。

『対話』の草稿の収集めぐる交渉は難航し、最終的にはほぼ失敗に終わったと言ってよい。というのも、持ち主たちはそれぞれがジラルダン侯爵に草稿を渡すことを拒んだり、自分が持っていることを頑なに言いたがらなかったからである。一人ひとりの返答をみてみよう。コンディヤックはルソーの願いどおり、『対話』は「今世紀が終わってから印刷されるための」作品であると言い、ジラルダンに断りを入れた<sup>17)</sup>。ブースビーは、ルソーがイギリスの読者のために加筆した注（「一人のイギリス人を私の[草稿の]受託者、そして信頼できる相手として選ぶことは、イギリス国民について私が考え、口にしてしまったかもしれない悪意を、正当な方法で埋め合わせてくれるだろうと私には思われるのです。彼らは私についてあまりに誤解をさせられていたので、私の方でも彼らについて時々思い違いをしていたのかもしれませんが」<sup>18)</sup>）を拠り所とし、自分が持っている草稿はイギリスで印刷され、出版されるべきだと返答し、ジラルダンに草稿を渡さなかった<sup>19)</sup>。ジュネーヴ草稿を持っていたムルトゥーは『全集』の編纂者の一人であったにも関わらず、草稿の存在を半年以上もジラルダン侯爵には秘密にしていた<sup>20)</sup>。なぜなら彼はルソーから、『告白』第二部と『対話』の出版について、「この作品は、[自分の]死後20年経つまでは発表しない」という意向を示す手紙を受け取っており、『対話』を『全集』にまとめたがっていたジラルダンとは意見が真っ向から対立していたためである<sup>21)</sup>。

バリ草稿に関して言えば、ダンジヴィレ伯爵からの直接の返事は残され

ていない。だが、先述したジラルダンの書簡の他に、アレクサンドル・ドレイル（Alexandre Deleyre, 1726-1797）<sup>22)</sup> という、ルソーと伯爵の共通の友人がジラルダンに宛てた書簡からも、伯爵が『対話』の草稿を持っていたことが明らかとなる。『対話』に関するドレイルからジラルダンへの手紙は2通残っている。

あなたは、ルソーがダンジヴィレ氏に託した『ルソーとジャン・ジャックの対談』（« Entretiens de Jean-Jacques avec Rousseau »）を受け取りましたか？彼はその作品を亡くなった人の妻に返すつもりだと私に言っておりました<sup>23)</sup>。

私はヴェルサイユでダンジヴィレ氏に会い […]、尊敬すべきルソーの草稿について話しました。彼は […] その原稿の複製を作らせ、あなたに複製の一つを託し、自分自身で原本を保管するつもりようです<sup>24)</sup>。

パリ草稿に添付されているメモ内の名前とは矛盾するものの、ルソーの死後にダンジヴィレ伯爵が『対話』の草稿の一つを所持していたことは確かなようだ。では、草稿を託すほどまでにルソーと伯爵は親しい関係であったのだろうか。残念ながら、ルソーがダンジヴィレ伯爵との親交や『対話』の委託について語っている資料も、ダンジヴィレ自身が『対話』について言及している資料も存在しない<sup>25)</sup>。しかし、それでもやはり、パリ草稿の所有者を解き明かすためには伯爵の人生に目を向ける必要があるだろう。

1730年1月24日、ダンジヴィレ伯爵は四人兄弟の末っ子としてボーヴェで生まれた。あまり裕福ではない軍人の家庭に生まれながらも、その聡明さをルイ15世の王太子から買われ、数年間軍人として過ごした後、彼の3人の息子たちの教育に携わるようになった。その三兄弟の末っ子こ

そ、後のルイ 16 世である<sup>26)</sup>。伯爵はルイ 16 世について、「ゆっくりではあったけれど、正しく、公正な知性を、わたしは彼のなかに認めていた」と評し、若き頃より、革命勃発後に国外亡命してからもずっと、死ぬまで彼を慕い続けた。伯爵が亡命先で記した『我が人生の記』(*Episode de ma vie*, 1906) という回想録は、王太子やルイ 16 世への尊敬の念の表明から始められているほどである。また、「マルモンテルの『回想録』についての注記」という副題を付けられたもう一冊の『ダンジヴィレ伯爵の回想録』(*Mémoires de Charles Claude Flahaut, comte de la Billarderie d'Angiviller. Notes sur les mémoires de Marmontel*, 1933) は、友人であったジャン＝フランソワ・マルモンテル (Jean-François Marmontel, 1723–1799) の『回想録』(*Mémoires*) の内容に注釈と修正を加えるために執筆された。特に、ネッケルとチュルゴーの政治的対立について多くのページが割かれている。ダンジヴィレ伯爵は『ダンジヴィレ伯爵の回想録』のなかで、「ヴァンセンヌの啓示<sup>27)</sup>」をめぐるフィロゾフたちのルソー批判を取り上げながら、ルソーを次のように評している。「彼は常軌を逸していたし、不正の人であった。わたしはそのことを分かっているし、彼にもそう伝えた。彼はそのことについて謝った。けれども彼の狂気はわたしをホロリとさせ、心を打つのだ。彼の賢明さはわたしを苛立たせる」<sup>28)</sup>。伯爵はルソーの狂気を認めながらも、彼を好ましく思っていたのだ。

ところで、伯爵の 2 冊の回想録の内容には非常に大きな特徴が見られる。それは、回想録であるにもかかわらず、これらの作品の中で彼が私生活についてはほとんど何も語っていないということだ。例えばルソーについてわずかに言及していたとしても、それは個人的な逸話ではなく、フィロゾフたちとの関係性なかにおける彼の立場に対してである。ルソーについてだけではない。ダンジヴィレ伯爵は自分の愛する女性やその親族について回想録のなかで語ることは決してなかった。彼の妻はマルシェ夫人 (Madame de Marchais) という、18 世紀を代表するサロンの聡明な女主人であった<sup>29)</sup>。伯爵とマルシェ夫人は長期にわたる恋愛ののちに、ようや

く結婚に至ったという経緯がある。

彼女は旧姓をエリザベス=ジョゼフ・ド・ラ・ボルド（Élisabeth-Josèphe de Laborde, 1725-1808）といい、非常に魅力的で、特に声楽の才能に恵まれた女性であったらしい。両親はルイ 15 世の公妾ポンパドゥール夫人（Jeanne-Antoinette Poisson, marquise de Pompadour, 1721-1764）と親交があり、彼女は結婚前、ヴェルサイユやフォンテーヌブロー、ベルヴェール城で夫人と共にオペラの舞台に立っていた<sup>30)</sup>。1747年、ポンパドゥール夫人の後ろだてによって、エリザベスは15歳年上のマルシェ男爵（Gérard Binet, baron de Marchais, 1710-1780）と結婚し、マルシェ男爵夫人となる。しかし、時は十八世紀。結婚後、彼女は主催していたサロンで、若く無名だったダンジヴィレと出会い、恋に落ちる。1752年以降<sup>31)</sup>、彼らの関係は公然の秘密であり、例えばシュアールが「マルシェ男爵の生前からか、死後からか、マルシェ夫人はダンジヴィレ伯爵とずっと共に過ごし、ついには結婚した」と記しているとおり、幾人かの同時代人が二人について記録を残している<sup>32)</sup>。彼女はチュイルリー宮フロール棟でサロンを開き、そこにはマルモンテル、ビュフォン、シュアール、ディドロやダランベール、ラクロといった当時を代表する作家たちが集まってきたのだった。ただし、このサロンへの訪問者リストの中に残念ながらルソーの名は見当たらない<sup>33)</sup>。

若く無名であったダンジヴィレも着実に出世し続け、1758年に伯爵の爵位とヴェルサイユへの居住許可を与えられる。また、パリのルーヴル宮の一室も与えられた。ルイ 16 世即位直後の 1774 年 8 月 24 日には王家建造物監督官に任命され、ルーヴル宮殿を美術館へと改装する計画に力を注ぐようになった<sup>34)</sup>。1780年にマルシェ氏が亡くなるとすぐに、翌年、彼らは長い愛人関係に終止符を打って結婚する。しかし、フランス革命が二人の運命を大きく変えた。革命勃発後、ダンジヴィレ夫妻の財産は差し押さえられ、伯爵は国外亡命を余儀なくされたのだった。ところが、妻である伯爵夫人は夫の懇願にも関わらずフランスにとどまり、自分一人の力で

1794年に財産を回復するのである。彼女はダンジヴィレ伯爵をパリに呼び戻そうとするが、もはや王のいないフランスになど未練のない伯爵は決して戻ってくることはなく、1792年に彼らは夫婦生活にピリオドを打ったのであった。彼女はその後、パリで再びサロンを開き、デュシスなどを招いていたが、1808年3月14日に83歳で亡くなる。一方、ダンジヴィレ伯爵はロシアやドイツ各地を転々とし、亡命貴族によって構成されたコンデ軍にも加わらず、1809年にハンブルク近郊のアルトナにて、無念のうちその生涯の幕を閉じたのであった。アルトナで書かれたダンジヴィレ伯爵の遺書にも、『対話』やルソーへの言及は一つもない<sup>35)</sup>。

以上のように、ダンジヴィレ伯爵やマルシェ夫人に関する伝記的資料や同時代人の証言は数多く存在する。しかしその一方で、夫婦と関係する資料をいくら探しても彼らとルソーとの関わりは明らかにされない。やはり、ダンジヴィレ伯爵が草稿を管理していたか否かを推定するには、ジラルダンが保管し続けた書簡が最も有効であるように思われる。

クラマイエル家の一人の夫人、クレリニー氏、ド・ラ・シャペル氏、そしてフロベール氏。これらの人物がパリ草稿の受託者としてメモに書き残されていたとしても、ルソーの死の直後にこの草稿を管理していたのはダンジヴィレ伯爵であると言い得るのは、何通かの書簡によってであることが明らかになった。ところが、ダンジヴィレ伯爵が所持していた『対話』の草稿は、本当に国民議会図書室で所蔵されている「パリ草稿」と同じものであったのか、という指摘がジャン＝フランソワ・ペランによって新たに提示されたのである。なぜ彼はそうした疑問を抱くようになったのだろうか。

## 2. パリ草稿はダンジヴィレ伯爵所有の草稿とは別物なのか？

この問題にアプローチするために、いま一度、パリ草稿の裏表紙に貼り付けられている作者不明のメモ書きに残された「クラマイエル家の一人の

夫人」について何か手がかりはないのか考えてみたい。ダンジヴィレ伯爵が執筆した2つの回想録や、彼についての数冊の伝記を読むかぎりでは、彼と「クラマイエル家の一人の夫人」の間には一見したところ何の接点もないように見える。ところが、ダンジヴィレ伯爵の妻となったマルシェ夫人とその家族についての様々な書物を紐解いてみると事態は一変するのだ。

マルシェ夫人は、銀行家であったジャン=フランソワ・ド・ラボルド（Jean-François de Laborde, 1691-1769）とエリザベス・フランソワーズ・ルヴァスール（Élisabeth Françoise Levasseur, 1695-1779）夫妻の二番目の子として生まれた。マルシェ夫人がボンパドゥール夫人と縁があったのは、母親ルヴァスールの死別した前夫ローラン=ルネ・フェラン（Laurent-René Ferrand, 1684-1719）がボンパドゥール夫人の近しい親戚であったからだ。マルシェ夫人には姉と妹が一人ずつ、弟が二人おり、順にフランソワーズ=モニック（Françoise-Monique, 1724-1808）、アンリエット・シャルロット（Henriette Charlotte, 1727-1777）、ジャン=バンジャマン（Jean-Benjamin, 1734-1794）、そしてジョゼフ=ルイ・ディボ（Joseph-Louis d'Ibos, 1735-1770）という名であった。マルシェ夫人は最初の夫であるマルシェ男爵と1747年4月9日に結婚しているが、そのわずか二ヶ月前の2月6日に、姉のフランソワーズ=モニックも徴税請負人と結婚している。そしてその相手こそ、フランソワ・フォンテーヌ・ド・クラマイエル（François Fontaine de Cramayel, 1712-1779）であった<sup>36)</sup>。

クラシック・ガルニエ版『ルソー全集』に先立って、2012年のルソー生誕300年の記念に、スラトキン・シャンピオンからも『ルソー全集』（*Œuvres complètes, Édition thématique du Tricentenaire*）が出版された<sup>37)</sup>。スラトキン・シャンピオン版の『対話』の编者であるフィリップ・スチュアート（Philip Stewart）も、「クラマイエル家の一人の夫人」とは、クラマイエル氏と結婚した姉のフランソワーズ=モニックかマルシェ夫人のどちらかであり、ダンジヴィレ伯爵の妻になったマルシェ夫人である可能性が高いとの見解を示している<sup>38)</sup>。続いて彼は、メモ書きに残されている

二番目の人物である「クレリニー氏」について、「フランソワ＝ガブリエル・ディザングルメル・ド・クレリニー」（François-Gabriel d'Isangremel de Clérigny）という名前を暴くまでに至った。しかしスチュワートの研究においては、この人物が何者であったのか、ダンジヴィレ伯爵やその妻や親類たちとの関係は明らかにされぬまままでとどまっている<sup>39)</sup>。

一方、クラシック・ガルニエ版『ルソー全集』の校訂者であるジャン＝フランソワ・ペランは、『対話』の受託者をめぐるスチュワートの推測に疑問を呈している。理由は3つある。まず、テレーズからデュペールーへの手紙の内容が問題となる。彼女が、「[…] ダンジヴィレ様が本物の、そして一番目の草稿をお持ちです。ジラルダン様はそのことをご存じです。[…] ですが賢明な伯爵様は、ジラルダン様に『対話』の写ししか渡しませんでした<sup>40)</sup>」と述べているため、ペランは伯爵が持っていたのはバリ草稿のような清書原稿ではなく、BnF草稿以前に書かれた『対話』の下書きであると推測した。

次に、十八世紀のみならず第一帝政期のパリにおける有名サロンの女主人であったマルシェ夫人を、知名度の低い姉の家族名で、つまり「クラマイエル家の一人の夫人」と呼ぶことは決してないからであるという。第三に、ルソーによってダンジヴィレ伯爵に託された草稿を、義理の姉であるクラマイエル夫人が所有する理由が見つからないからであるという。革命勃発後、財産を没収され、国外に亡命せざるをえなくなってしまったダンジヴィレ伯爵が、先の見えぬ試練の旅に、あえてルソーの草稿を携えていきはしまい。亡命時に、妻であるマルシェ夫人ではなく、義姉であるクラマイエル夫人に草稿を渡す理由はない、というのだ。結論として、ペランはバリ草稿に添付されているメモ書きに残された人物名は間違っているか、偽装されているかのどちらかであるとしている<sup>41)</sup>。つまり、国民議会図書室に所蔵されている「バリ草稿」の他に、ダンジヴィレに託された下書きに近い形態の草稿が存在しているというのが彼の主張なのである。

だが、テレーズの打ち明け話は信用ならない。というのも、彼女は『対

話』の草稿の受託者を正確には把握していないからである。同じ手紙のなかで、彼女は「夫は三番目の草稿をジラルダン様にお渡ししました」と述べているが、ルソーはそれをジラルダン侯爵ではなくムルトゥーに渡した。それに、もしもテレーズの言うとおりに、ジラルダン侯爵が『対話』の草稿を持っていたとするならば、彼は躍起になって草稿を探する必要などなかったはずだ。さらに言えば、『対話』の出版は「20年後」というルソーの最期の願いを叶えるためにムルトゥーと協力し合ったはずなのだ。

また、スラトキン版ではクレリニー氏についての言及があるにも関わらず、クラシック・ガルニエ版では一切の言及がないことから明らかなように、ガルニエ版にはパリ草稿に添付されたメモ書きに記されている人々の名に関する調査が不足しているように思われる。そのため、ペランが示した理由だけでメモ書きを偽物と断ずるのは時期尚早といえるだろう。

そこで以下では、ペランの論に異議を唱えながら、「クラマイエル家の一人の夫人」、ダンジヴィレ伯爵、そしてクレリニー氏の関係についての調査方法と結果を示したい。この調査は、印刷された本とともに、フランス国立中央文書館（Archives nationales）に所蔵されている古文書を用いて行われた。マイナーな文書や古文書調査を通して、主要な文献からだけでは見出すことのできない彼らの親密な関係を見出すことができるだろう。

### 3. 調査とその結果

18世紀当時、貴族はパリやヴェルサイユの住居だけでなく、パリ近郊にも城を持ち、良い季節になると人々をそこに招き、舞台やオペラを上演するという流行があった。クラマイエル夫妻もパリではサンティエ通りにアパルトマンを持っていたが、1753年、ムラン近郊にも城を買った<sup>42)</sup>。その城は豪華絢爛で、訪れる人々の心を大いに魅了したという。とりわけ、1768年に完成した城内の劇場が大変素晴らしいとの評判であった。クラマイエル城の劇場で上演される演目には、クラマイエル夫人の弟であ

るジャン＝バンジャマンや妹であるマルシェ夫人もしばしば出演していたという<sup>43)</sup>。また、将来の義弟となるダンジヴィレ伯爵も客人に名を連ねていた<sup>44)</sup>。ダンジヴィレ伯爵の回想録には書かれていないが、彼らはしばしば行動をともにしていたのだ。

だが、クレリニー氏についての重要な手がかりとなるのは、クラマイエル夫人でも、ダンジヴィレ伯爵夫人でもなく、ラボルド姉妹の末妹であるアンリエットであった。若くして亡くなる彼女についての文献は姉妹たちのそれに比べてもっと少ない。しかし、彼女こそダンジヴィレ伯爵、ラボルド家、そしてクレリニー氏の間を見出すうえで鍵となる人物なのである。アンリエットについて、彼女の愛人の一人で、彼女を誠実に愛した数少ない人物であるデュフォール（Dufort de Cheverny, 1731-1802）の『回想録』（*Mémoires*, 1970）を参照し、彼女がどのような女性であったのか描き出してみたい<sup>45)</sup>。

アンリエット・シャルロット・ド・ラボルドは1727年にラボルド家の三番目の子どもとして生まれた。彼女は1750年4月6日に徴税請負人オーギュスト・シモン・ブリサルル氏（Auguste Simon Brissart, 1726-1779）と結婚し、ブリサルル夫人となる。ところが不幸なことに、夫は女優のデシャン嬢（Deschamps, 1730-1764）に夢中になって金を貢ぎ、妻には目もくれなかったため、彼らの結婚生活は当初から冷めきっていた。夫の不誠実さに深く傷つけられた彼女も、心の隙間を埋めるかのように多くの愛人と関係を持つようになっていったのだった。彼女はブザンヴァル侯爵、（le marquis de Besenval）、トゥルドネ伯爵（le comte de Tourdonnet）、ドネザン侯爵（le marquis de Donnezan）、ブランカ伯爵（le comte de Brancas）など数多くの男性と浮名を流した<sup>46)</sup>。さらに、1年という短い期間ではあったが、ルソーと親しいコンチ公とも親密な関係で結ばれており、彼の住居であったタンブルへも通っていたようだ<sup>47)</sup>。

姉妹のなかで一番若かったにも関わらず、誰よりも早く彼女は亡くなる（1777年5月12日）。1776年10月22日に公証人ガスパーール・モメ

（Gaspard Momet）に託された遺書には、兄弟姉妹には遺産を譲るが、夫には何も遺さないことなどが細かに記されている。その遺書には、マルシェ夫妻、クラマイエル夫妻、ブリサール氏、ラボルド兄弟の署名のみならず、当時まだマルシェ夫人の愛人であったダンジヴィレ伯爵の署名もある。彼は遺言執行者としてそこに名を連ねているのだ。アンリエットは「昔からの友人」であるダンジヴィレ伯爵に、「わたしを思い出してもらうために、姉のマルシェ夫人に頼んで描かせた自分の肖像画付きの 6000 リーヴルの金の小箱」を遺した。そしてもうひとり、遺言執行者として選ばれたのが「パリ高等法院弁護士のイザングルメル・ド・クレリニー氏<sup>48)</sup>」だったのである。遺書には、「わたしは彼（クレリニー氏）にも 2400 リーヴルのダイヤモンドを受け取って欲しい」と記されている<sup>49)</sup>。この遺言書が明らかにしているのは、ダンジヴィレ伯爵とクレリニー氏が、マルシェ夫人のみならず、彼女の夫であるマルシェ男爵、クラマイエル夫妻、ブリサール夫妻、ラボルド家の人々とともに、彼ら家族の重要な場面に立ち会うほどの間柄であったということである<sup>50)</sup>。

ラボルド家の人々が正式な書類を作成する時、公証人ガスパール・モメのもとを訪れること、ダンジヴィレ伯爵やクレリニー氏がしばしば立ち会うことが明らかになったため<sup>51)</sup>、フランス国立中央文書館に所蔵されている、1776年から1788年までのモメの資料全てに目を通し、『対話』の草稿の委託についての文書を探したが発見には至らなかった。ただし、そのなかにはクレリニー氏とダンジヴィレ夫妻が私生活でも親しい関係にあったことを証明する資料がいくつかあった。

それらの文書を通して、両者の私生活における親密さをさらに示してみたい。それは両者の結婚誓約書に見られる。1781年6月11日にモメのもとで作成された、クレリニー氏とチヴァン嬢の結婚の誓約書にはダンジヴィレ伯爵とマルシェ夫人の署名が記されている<sup>52)</sup>。一方で、クレリニー氏もまた1781年9月3日に執り行われたダンジヴィレ夫妻の結婚の際の誓約書にサインをしているのだ<sup>53)</sup>。

『ルソー、ジャン=ジャックを裁く』のバリ草稿（土橋）

また、ジャック=アンドレ=ロベール・ド・ヴィスム（Jacques-André-Robert de Vismes, 1903-?）によって執筆されたダンジヴィレ伯爵についてのエッセーには、亡命先からダンジヴィレ伯爵が何度かクレリニー氏に手紙を書いていたことが記されている。「わたしはセトゥイユ氏が与えてくれた機会を利用して、クレリニー氏に手紙を書きました。ですが、このイザングルメル氏はあまりに臆病者であったため、あらゆることを疎かにしました」<sup>54</sup>。残念ながら、手紙の詳細な内容は不明である。しかし、いずれにせよ彼らは亡命後も手紙を交わし続けていたのだった。だから、ダンジヴィレ伯爵がクレリニー氏に草稿を託したとしても何ら不思議なことはない。

ダンジヴィレ伯爵が亡命先で亡くなったとき、パリにいた彼の兄弟にその悲しい知らせを伝えるために、ドーモン公爵が手紙を書いたのもクレリニー氏に対してであった。「ヌイイ夫人は、我々の共通の友人であり、あなたの隣人ピラードリ氏の弟であるダンジヴィレ氏の死の知らせを伝えるために、昨日あなたに手紙を書きました。[…]<sup>55</sup>」

ジャン=フランソワ・ペランはクラマイエル夫人とダンジヴィレ伯爵の関係の希薄さを理由の一つとして、夫人が『対話』の草稿を伯爵に渡すはずがないと述べているが、ダンジヴィレ伯爵とラボルト家、そしてクレリニー氏のあいだにある緊密な関係が見出された今、『対話』の草稿が彼らの手から手へ渡っていた可能性を否定することは決してできないだろう。

## おわりに

ダンジヴィレ伯爵が『対話』の一つの草稿を持っていたことは確かである。その草稿は、国民議会図書室所蔵の「バリ草稿」と呼ばれる草稿と同一のものであると見なせる。ダンジヴィレ伯爵は、マルシェ夫人やラボルト家との関係を自分自身の回想録では告白しなかったが、様々な資料を用いて彼の私生活にまで調査範囲を広げることによって、ラボルト家だけで

なく、クレリー氏との親密な関係を見出すことができた。

パリとサン=ドニにあるフランス国立中央文書館や、ヴェルサイユ図書館に保管されているダンジヴィレ伯爵に関する古文書はすでに閲覧した。「パリ草稿」に関する証言をさらに探すために、今後、ダンジヴィレ伯爵の生家近郊に遺されている古文書の調査が必要になるだろう<sup>56)</sup>。そしてまた、ド・ラ・シャベル氏とフロベール氏についての調査も引き続きおこなっていきたい。

## 注

- 1) Cote du document: NAF 25700 (2). フランス国立図書館 (BnF) の Banque d'images 内に実物がある。(http://visualiseur.bnf.fr/Visualiseur?Destination=Daguerre&O=23013923&E=JPEG&NavigationSimplifiee=ok&typeFonds=noir、2017年9月10日閲覧)。BnF 草稿はコンディヤックの死後、彼の姪であるサント=フォア夫人 (M<sup>me</sup> de Sainte-Foy) が管理し、1800年12月31日に開封された。
- 2) Cote du document: Ms. 4925. ロンドン草稿とその出版をめぐる詳細と問題については拙論を参照のこと。土橋友梨子、「ジャン=ジャック・ルソー『対話』のロンドン草稿—ブルック・ブースビーによる編集について—」、『日本18世紀学会年報』、日本18世紀学会、29号、p. 25-38、2014年。
- 3) Francis De Crue, *L'ami de Rousseau et des Necker, Paul Moutou à Paris en 1778*, Paris, Ancienne Librairie Honoré Champion, 1926, p. 92.
- 4) 『ジャン=ジャック・ルソー全集』出版の試みについては以下の研究を参照のこと。Raymond Birn, *Forging Rousseau*, Oxford, Voltaire Foundation, 2001; Philip Stewart, *Editer Rousseau: enjeux d'un corpus, 1750-2012*, Lyon, ENS éd., Institut d'histoire du livre, 2012.
- 5) Cote du document: 1493. 1819年から、ピエール=ポール・ドリュオン (Pierre-Paul Druon) によって管理されていたフランス下院図書館 (la Bibliothèque de la Chambre des députés、現国民議会図書館) に所蔵される。「Les manuscrits de Rousseau à l'Assemblée nationale », dans *Rousseau et la Révolution*, Paris, Gallimard, 2012, p. 185-209.
- 6) Voir, *OC*, I, p. 1903 et Gallica.
- 7) CC. 7313 (Girardin à DuPeyrou, Ermenonville, Par Senlis 4 8<sup>bre</sup> 1778, p. 4.) ルソーの書簡からの引用は以下の版を用い、これ以降は先述のように略記する。*Correspondance complète de Jean-Jacques Rousseau*, établie et annotée par R. A. Leigh,

Genève, Institut et musée Voltaire, 1965–1991.

- 8) BnF 草稿とロンドン草稿の二草稿について言及したあと、国民公会は次のように述べている。「三番目の、そして最後のコピーに関して、それは信頼できる人の手に委ねられたように思われる。というのは、補遺付きの完全な草稿は1782年にジュネーブ版にて日の目を見たからだ。しかし出版者たちは、どんな方法でこの作品が読者の手に入ったのかを説明しなかった。そして彼らはこの草稿がその後どうなったのかも知らせなかった。／しかし、三番目のコピーであり、1782年版で印刷を許可され、三つの対話と補遺を持ったこの草稿は今日国民議会図書館に所蔵されている」（France. Convention nationale. Comité d'instruction publique, *Procès-verbaux du Comité d'instruction publique de la Convention nationale*, publié et annotés par M. J. Guillaume, 1891–1958, tome VI, p. 941–942.）しかし、『ル・タン』紙（*Le Temps*, 1913年9月19日、4面）によると、「印刷されたものとは少し異なる」と書かれているように、この時期には出版されたジュネーブ草稿とバリ草稿と内容の差異は認識されていたようだ。
- 9) Cl. Garnier, p. 946–950. ペランの版からの引用は以下の版を用い、これ以降は先述のように略記する。J.-J. Rousseau, *Rousseau juge de Jean Jaques* (manuscrit « Condillac »), avec les variantes ultérieures, édition critique par Jean-François Perrin, *Œuvres complètes*, tome XVIII, Paris, Classiques Garnier, coll. “Bibliothèque du XVIII<sup>e</sup> siècle”, 2016.
- 10) CC. 6749 (Rousseau à Saint-Germain, A Paris, le 14 juillet 1770, t. XXXVIII, p. 62.)
- 11) ルソーの晩年については多くの研究があるが、例えば以下を参照のこと。ジャック＝ルイ・メネトラ、『わが人生の記 十八世紀ガラス職人の自伝』、喜安朗訳、白水社、2006年。
- 12) Jacques Henri Bernardin de Saint-Pierre, *La Vie et les ouvrages de Jean-Jacques Rousseau*, édition présentée et annotée par Raymond Trousson, Paris, Honoré Champion, 2009.
- 13) Claude Eymar, « Examen des jugements sur J. J. Rousseau » et « Mes visites à J. J. Rousseau », in *Œuvres inédits, suivies d'un supplément à l'histoire de sa vie et de ses ouvrages*, par Musset-Pathay, tome seconde, Paris, Galerie Delorme, 1825.
- 14) Félicité de Genlis, « Les souvenirs de Félicité L\*\*\* », dans Catriona Seth, *La fabrique de l'intime, Mémoires et journaux de femmes du XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris, Robert Laffont, 2013. そのほかにも、ルソーの私生活を垣間見ることができる作品がいくつも残されているのだが、『対話』の執筆に関わる記述はひとつもない。一例として以下の作品を参照のこと。André Gretry, *Mémoires, ou Essais sur la musique*, 1797; Carlo Goldoni, *Mémoires pour servir à l'histoire de ma vie et à celle du théâtre*,

- 1707-93, Édition présentée et annotée par Paul de Roux, Paris, Mercure de France, 2003; Olivier de Corancez, *De J.-J. Rousseau*, au bureau du "Journal de Paris", 1797.
- 15) 『告白』朗読会にも参加していたメスム侯爵夫人（Anne-Marie-Henriette Feydeau de Brou, La marquise de Mesmes）に宛てた手紙や、サン=ジェルマン、マルゼルブへ宛てた手紙は『対話』と同じ調子で書かれている。ただし、このような内容の手紙はほぼ残っていない。かわりにこの時期の手紙で数多く残っているのは植物採集に関する手紙である。
- 16) *Rousseau juge de Jean-Jacques*, OC, I, p. 982-989.
- 17) CC. 7313 (Girardin à DuPeyrou, Ermenonville, Par Senlis 4 8<sup>bre</sup> 1778, t. XLII, p. 19.)
- 18) *Rousseau juge de Jean-Jacques*, OC, I, p. 1640.
- 19) CC. 7471 (Girardin à DuPeyrou, 13 fevrier 1779, XLIII, p. 126、下線強調は引用者)
- 20) CC. 7419 (DuPeyrou à Girardin, Neufchatel, 29 X<sup>bre</sup>, 1778, N° 13, p. 276-277.)
- 21) CC. 7506 (Moultou à Girardin, le 25 mars 1779, XLIII, p. 204.)
- 22) ダンジヴィレはジラルダンと『対話』をめぐる交渉をする際に、ドレイルを間に入れた行うことを求めた。CC. 7242 (Alexandre Deleyre à Girardin, A Dame-Marie\_les-Lys, près Melun, Ce 5<sup>e</sup> aoust 1778, p. 130.) Madeleine Molinier, *Les relations de Deleyre et de Rousseau*, 1753-1778, SVEC, Vol. LXX, p. 43-176, 1970; Alexandre Deleyre, *Essai sur la vie de M. Thomas, de l'Académie française*, Paris, 1791.
- 23) CC. 7351 (Alexandre Deleyre à Girardin, au Coudray sur Seine, ce 12 9<sup>bre</sup> 1778, t. XLII, p. 110. 下線強調は引用者)
- 24) CC. 7405 (Deleyre à Girardin, A Dame-Marie\_les-Lys, ce 18 X<sup>bre</sup> 1778, t. XLII, p. 245.)
- 25) ダンジヴィレ伯爵の回想録である『わが人生の記』を編集し、その序文にて彼の伝記を書いたデンマーク人研究者ルイ・ボベは、ダンジヴィレ伯爵が『対話』について、「彼 [ルソー] の狂気の疑いのような証拠」であると述べていると記している。しかし、この言葉がいつ、どのような状況で発せられたのかは原典が記載されていないため真偽のほどは明らかではない。Charles Claude Flahaut de la Billarderie, comte d'Angiviller, *Episodes de ma vie, Efterladte Papirer fra den Reventlowske Familiekrede i Tidsrummet, 1770-1827*, Udgivne paa Foranledning af Hofjægermester, Lehns greve C. E. Reventlow ved Louis Bobé, syvende bind, Kjøbenhavn, Lehmann og Stages, 1906, p. XXV.
- 26) ダンジヴィレの伝記は三つあるが、『対話』への言及はない。Paul Fromageot, *Le roman du Comte d'Angiviller*, Paris, Picard, Extrait de la *Revue des Etudes histoire*, 1907; Jacques Silvestre de Sacy, *Le Comte d'Angiviller: dernier directeur général des*

- bâtiments du Roi*, Éditions d'histoire et d'art, Paris, Plon, 1953; Jacques-André-Robert de Vismes, *Essai sur la vie du comte d'Angivillers*, collection du Pic Hardy, Soissons, H. d'Arcosse, 1947.
- 27) 「ヴァンセンヌの啓示」については『告白』を参照のこと（*Les Confessions*, OC, I, p. 351.）。また、マルモンテルをはじめ、ルソーと敵対する人物たちはこの逸話について否定的な意見を述べている。
- 28) Charles Claude Flahaut de la Billarderie, comte d'Angiviller, *Mémoires de Charles Claude Flahaut, comte de la Billarderie d'Angiviller. Notes sur les mémoires de Marmontel*, publiés d'après le manuscrit par Louis Bobé, Copenhagen, Levin et Munksgaard, et Paris, C. Klincksieck, 1933, p. 36.
- 29) マルシェ夫人のサロンについては例えば以下を参照のこと。ゴンクール兄弟、『ゴンクール兄弟の見た18世紀の女性』、鈴木豊訳、平凡社、1994年。
- 30) Humbert de Gallier, « La comtesse d'Angivillier (documents inédits) », *La revue*, 1er-15 juin, Paris, p. 323-341 (1er) et pp. 519-533 (le 15), 1913, p. 325.
- 31) Jean de Cayeux, *Hubert Robert*, Paris, Fayard, 1989, p. 199.
- 32) Jean-Baptiste-Antoine Suard, *Mémoires et correspondances historiques et littéraires inédits, 1726 à 1816*, publié par Charles Nisard, Paris, Michel Lévy frères, 1858, p. 216-217.
- 33) サロンの常連については以下を参照のこと。Humbert de Gallier, *Les Moeurs et la vie privée d'autrefois. Gens de cour et d'autres lieux*, 2e édition, Paris, Calmann-Lévy, 1921, p. 220. マルシェ夫人はルソーの非社交性を好んでいなかったが、当時の夫であるマルシェ男爵はルソー作品を好んで読んでいたという。Léon-Honoré Labande, *Le Château et la baronnie de Marchais*, Paris, Honoré Champion, 1927, p. 121.
- 34) 鈴木杜幾子、「王家建造物監督官ダンジヴィレ伯爵の美術行政」、『美の司祭と巫女-西洋美術史論集』、中央公論美術出版、1992年。
- 35) Paul Piper, « Das Teitament des grafen d'Angiviller », dans *Altona und die Fremden*, Altona, J. Harder, 1914, p. 156-165.
- 36) ラボルド家の人々については多数の文献を参照し、第三章にてそれらを提示する予定であるが、ここでは一例として以下の文献を示す。Léon-Honoré Labande, *Le Château et la baronnie de Marchais*, Honoré Champion, Paris, 1927.
- 37) Jean-Jacques Rousseau, *Œuvres complètes, Édition thématique du Tricentenaire*, sous la direction de Raymond Trousson et Frédéric S. Eigeldinger, Genève-Paris, Slatkine-Champion, 2012, 24 vols. 『対話』は第二巻に収められているため、以下ET, IIと略記する。
- 38) « Introduction », *ET*, II, p. 40.
- 39) *Ibid.*

- 40) CC. 7681 (Thérèse à DuPeyrou, le 6 mars 1780, p. 179. 強調は引用者。)
- 41) *Cl. Garnier*, p. 948–949.
- 42) クラマイエル城については例えば以下の文献を参照のこと。Théophile Lhuillier, *Le château de Cramayel en Brie et son théâtre de société au dix-huitième siècle*, Paris, E. Plon et C<sup>ie</sup>, 1882; Mémoire de Moissy, *Moissy-Cramayel: un village rue de la Brie*, Saint-Cyr-sur-Loire, A. Sutton, 2008; La vicomtesse de Alix de Janze, *Les Financiers d'autrefois, Fermiers généraux*, Paris, Paul Ollendorff, 1886.
- 43) La vicomtesse de Alix de Janze, *op. cit.*, p. 298–299.
- 44) Yves Durand, *Les fermiers généraux au XVIIIe siècle*, Maisonneuve et Larose, 1996, p. 559.
- 45) Jean-Nicolas Dufort de Cheverny, *Mémoires*, éd. par Pierre-André Weber, Paris, les Amis de l'histoire, 1970. 『回想録』によると、ブリサール夫人の住居はルソーの住まいから目と鼻の先にある、プラトリエール通りビュリオン館であった (p. 112)。
- 46) Yves Durand, *op. cit.*, p. 335–336. 愛人の一人であったブザンヴェル侯爵は『回想録』を書いているが、アンリエットについては何も書き記していない。
- 47) Robert-Charles Yve-Plessis, *Vie privée du prince de Conty, Louis-François de Bourbon (1717–1776)*, 1907, p. 258–259.
- 48) 彼については「パリの高等法院弁護士」という肩書の他に、ジャン・バチスト・ベルタン (Henri Léonard Jean Baptiste Bertin, 1719–1792) の首席秘書官であったことしか明らかではない。« *Mémoires de l'Académie de Nîmes*, VIIe série, Tome XX, Année 1897, p. 310 ou p. 352.
- 49) Archives Nationales: exécuté au vendredi 29 aout 1777: MIC/Y//74: Châtelet de Paris et prévôté d'Ile-de-France ou MC/ET/XVI/821: Notaire Momet. また、以下の文献も参照のこと。Théophile Lhuillier, *Une actrice du théâtre de Mme de Pompadour, Mme Binet de Marchais*, Paris, N. Charavay, 1903, p. 27.
- 50) アンリエットの遺言に関係するその他の文書にも彼らの名前がある。MC/ET/XVI/823: Le 22 may 1777, Inventaire, Mde. Brissart; MC/ET/XVI/827: 1er may 1778, Partage, mad. Brissart; MC/ET/XVI/827: Le 2 Juin 1778, Quittance, Succession Brissart.
- 51) ジャン=バンジャンも公証人モメのもとで財産に関わる書類を作成する時にしばしばクレリー氏の力を借りている。Mathieu Couty, *Jean-Benjamin de Laborde ou Le bonheur d'être fermier général*, Michel de Maule, 2001, p. 126, 148–149.
- 52) MC/ET/XVI/838: Le 11 juin 1781, Mariage, M. D'Izangremel (D'Izangrenel et demoiselle Thivend)
- 53) MC/ET/XVI/839: Le 3 7bre1781, Mariage, M. Le Comte d'Angiviller et Mde La baronne de Marchais.
- 54) Jacques-André-Robert de Vismes, *Essai sur la vie du comte d'Angivillers*, collection

『ルソー、ジャン=ジャックを裁く』のバリ草稿（土橋）

du Pic Hardy, Soissons, 1947, p. 84-85. ヴィスムはジャン=バンジャマンの妻の子孫である。

55) *Ibid.*, p. 91.

56) メーニュレ=モンティ近郊の歴史学会 (La Société historique de Maignelay-Montigny et des environs) が、ダンジヴィレ伯爵の人生に関わる古文書を保管している。